

# 国語 試験問題

二月一日実施

## 注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄らんに記入しなさい。

京華中学校

受験番号

氏名

余白

問題は次のページから始まります。

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学一年生の早紀は、内気な性格であるにもかかわらず、吹奏楽部員というだけで合唱コンクールの指揮者を任されてしまった。岳や晴美、幼なじみの音心（そんしん）といったクラスメートに支えられながら、クラス一丸となってコンクール優勝を目指していた。しかし、本番を目前に控えた朝、早紀は貧血（ひんけつ）で倒れて手首を負傷し、頭を打っているために一晩入院してしまった。

翌日、早紀は無事、退院した。

お母さんの運転する車が学校の前に着くやいなや、

1 「行ってきます」

早紀は声を張り上げて、車から飛び出した。

「走らないで。気をつけてー」

慌（あわ）てて車から降りてきたお母さんの声が、早紀の背中にぶつかかったが、早紀は振り向きもせず、軽く左手を上げた。

校舎の外壁の時計を見ると、ちょうど三時間目が終わった休み時間だ。なんとか、休み時間の間に教室に入りたい。転ばないように慎重（しんちょう）に、でもなるべく急いで、階段を早足で駆け上がった。

開いていた教室の入口に立つと、

「早紀ー」

女子がわっと、早紀を取り囲んだ。男子からも、おーっというどよめきがあがった。人垣（ひとがき）を押しつけて、晴美が早紀の正

面（おもて）ににゅっと姿を出した。

「水野さん、だいじょうぶ？ ってか、だいじょうぶではないか」

晴美は、右手首に巻かれた早紀の包帯に目を落とした。

2 「ん……」

喉（のど）にふたをされたみたいに、言葉がつまる。

「水野さん、ドンマイだよ。指揮者は岳がやってくれることになったし、今朝の朝練はなんと、全員参加」  
晴美が励ましはげの言葉を、やわらかいシヤワーのようにかけてくれる。

でも、ここで黙だまっているのはダメだ。みんなの好意あまに甘あまえているだけじゃダメだ。自分でちゃんとやわなきや。

早紀は晴美の目を見てうなずくと、教卓きょうたくの前まで歩みを進めた。みんなはじつと早紀を見守っている。休み時間とは思えない静かな教室で、早紀は自分を落ち着かせるように、ごくんとつばを飲み込んだ。

「みんな。大事なときに、怪我けがしてしまつて……、迷惑めいわくかけてしまつて、本当にごめんなさい」

早紀はぺこりと頭を下げ、しばらく静止した。すると、

「気にすんなよ。別に水野の不注意だつたわけでもないし」

「歌えるなら良かったじゃん」

「そうだよ。早紀がソプラノに加わってくれるんだから、心強いし」

と、男子からも女子からも次々と声が上がつた。

3 目に水がたまつていったのは、頭が下がっていたせいではない。早紀はゆっくり上体を起こすと、涙なみだがこぼれてしまわないように天井てんじょうにあごを向けた。

放課後、早紀が音心と部活へ行く途中、

「早紀、なんだか別人みたいだった」

音心は口を開いた。

「え？」

4 「幼稚園ようちえんのときからのつきあいだけど、あんな早紀初めて」

休み時間にみんなの前で話したことだと分かつたけれど、早紀は黙だまっていた。音心の声の響ひびきには、意外だつたという驚おどろきだけじゃなく、どんなことがあつても圧倒あつうてき的に味方みかただという、心地こころのよいぬくもりがにじんできた。

早紀は、となりを歩く音心の横顔を見た。いつから見上げるくらいに背が伸びたのだろうか。小学校のころは、それほど変わらなかつたはずだ。

音楽が好きな気持ちは変わらないのに、この非凡ひびんな幼なじみのおかげで、自分の凡庸ぼんようさを思い知らされてきた。自分を卑下ひげしたり、音心を **A** 妬ねたんだりした。

でも、今、思う。

音心がいることが、どれほど自分の支えになっていくかを。

友だちには信じてもらえないかも知れないけれど、本気の異性の親友を、早紀はあらためて頼もしく思った。

音楽室に入ると、すでに三年の女子の先輩が何人か来ていた。いつもの自分に戻ってしまった早紀は、**B** 部長の丹治先輩に近づいた。吹奏楽部の上下関係には半年経っても、いっこうに免疫がつかない。

「あ、あの。右手首を怪我してしまったので、しばらく練習出来ません」

丹治先輩は早紀の包帯を **C** 見た。

「骨折？ どしたの？」

先生と話すより緊張する。早紀は直立して答えた。

「転んでしまって……。ひびですみましたが、一ヶ月くらいかかりそうです」

「へえ、そんなに。結構かかるんだー」

横にいた先輩が、いたわりもなく、顔を突っ込む。

「水野さん、チューバだったよね。まあ、まだ戦力外だから、そんなに痛手はないか」

「一ヶ月吹けないと、さらに遅れるね」

事実だけれど、グサグサくる。裁縫セットの針山になった気分だ。早紀がつま先に目線を落とすと、

「じゃ、治るまでは見学。雑用あったら頼みたいけど、右手使えないんじゃないかね」

丹治先輩の、まるで「役立たず」と言わんばかりの言いぐさに、さらに縮こまる。

「すみません」

「邪魔にならないように、あのへんについて」

丹治先輩は、音楽室のすみっこ物置と化してあるあたりを指差した。

やがて部長がそろると、パート別練習が始まった。早紀は目立たないように、丸いすに腰をまるめて座っていた。丹治先輩が言うように、右手が使えないと手伝いようもない。そんななか、早紀は頭の中で、『ソノリテイ』のソプラノのメロデーを必死で奏でていた。いろんな楽器の音が、否応なしに耳に飛び込んでくる。耳を塞ぎたくなかった。

少しでも早く、この時間が終わることだけを切に願った。何度も時計を見てしまうが、数分しか経っていない。壊れていくんじゃないかと思うくらいに、時計が進まない。

合唱コンまではあと五日しかない。少しでも時間があれば、歌の練習をしたい。今、わたしは、歌いたい。

早紀は[D]立ち上がった。パートごとに固まっている部員たちをよけながら、前方にいるフルートの丹治先輩のもとに、引き寄せられるように近づいた。練習の合間まで息を殺す。ちよつとの隙を狙って声をかけた。

「丹治先輩」

「何。そこに立ってられると、気が散るんだけど」

丹治先輩は面倒くさそうに振り向いた。すでに顔が、ゆがんでいる。

「すみません。先輩、わたし、合唱コンが終わるまで、部活を休ませてもらいます」

はじめは、「休ませてもらえませんか？」と言うつもりだった。だけど気づいたら、言い切っていた。

「は？」

「練習出来なくても、見学しなきゃいけないのは、分かっています。でも、歌の練習がしたいんです。合唱コンが終わるまでは、お願いします」

早紀は先輩に有無を言わせぬ勢いで、直角に腰を折った。

「分かった。そんなに頭下げないでくれる？」

丹治先輩は早口で言うのと、すぐに楽譜に向き直った。少し意外だった。<sup>6</sup>

「ありがとうございます」

そうは言われても、もう一度、思い切り頭を下げた。

「一年生なのに、すごい度胸。いいの、許して？」

「ま、いいんじゃない」

ささやき声を背中で聞きながら、早紀は帰り支度を急いだ。廊下に飛び出すと、ピアノ付近で練習していた打楽器グループの音心が、首を伸ばしてこちらを見ているのに気がついた。早紀が目であなずくと、音心はこっそり親指を立てた。<sup>7</sup>

(佐藤いつ子『ソノリテイ はじまりのうた』による)

1.  A  D にあてはまる言葉として適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア ちらりと    イ こっそり    ウ 恐る恐る    エ おもむろに

2. ——— 線部1に「早紀は声を張り上げて、車から飛び出した」とありますが、このときの早紀の気持ちとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 授業が始まってから教室に入ると、みんなからの注目されて気まずい思いをすることになってしまうので、休み時間の間にさりげなく教室に入りたいとあせっている。

イ 授業が始まってから教室に入ると、晴美や音心に自分が入院していた間の練習の様子を聞くことができなくなってしまったので、早く教室に行き、話したいとあせっている。

ウ 教室に着く前に授業が始まってしまおうと、みんなに謝罪するタイミングが先送りになってしまおうので、なんとか休み時間の間に教室にたどり着きたいとあせっている。

エ 教室に着く前に授業が始まってしまおうと、仲のいい晴美や音心への謝罪が遅れて気まずくなってしまおうので、タイミングをうかがうために、早く教室に行きたいとあせっている。

3. ——— 線部2に「喉にふたをされたみたいに、言葉が詰まる」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 怪我した経緯の説明や謝罪を落ち着いてしなくてはならないと思っていたが、次々にみんなから質問を浴びせられ、どの質問から答えていけばいいのかわからなくなり混乱してしまったから。

イ みんなの前で話すべきことを頭の中で組み立てていたが、予想外の質問や励ましの言葉をシャワーのようにかけられ、組み立てていた話の順序が崩れて頭の中が真っ白になってしまったから。

ウ 怪我したことについてきちんと謝らなければならぬと決意していたが、みんなの注目を受けたことによって自分の苦手なことを後回しにしてしまうと性格が出てしまったから。

エ 自分の気持ちをきちんと伝えなくてはならないと決意していたが、みんなが優しい言葉をかけてくれて、このままこの優しさに身をゆだねてしまいそうになってしまったから。



4. ———線部3に「目に水がたまっていた」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 歌が苦手な自分では指揮者ほどクラスに貢献できないと不安に思っていたが、そのような自分をみんなが頼りにしてくれていることがわかり、安心することができたから。

イ 自分のせいでみんなに迷惑をかけることになってしまったと自身を責めていたが、そのような自分にあたたかい言葉をかけてくれる、みんなの優しさが身に染みみたらから。

ウ 自分にしか指揮者は務まらないのに怪我をしまつて罪の意識を持っていたが、他にも指揮者を務める人がいたことが判明し、罪悪感が消えていったから。

エ もともと押しつけられる形で決まった指揮者だったが、みんなの言葉を聞いて、もう指揮者を務めることができないのだとあらためて実感し、悲しみがこみ上げたから。

5. ———線部4に「休み時間にみんなの前で話したことだと分かったけれど、早紀は黙っていた」とありますが、このときの早紀の気持ちとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 正直に伝えた自分の気持ちをみんながどう受け取るかはわからないが、音心は絶対に自分のことを受け入れてくれるにちがいないと思い、心強いと感じている。

イ もともと内気な自分の努力と勇氣は他の人には理解してもらえないが、幼なじみの音心は理解してくれているのだとあらためて実感して、ありがたいと感じている。

ウ 音楽の分野では常に上をいく存在の音心を内心妬んでいたが、内気で周囲と打ち解けるのが苦手な自分を理解してくれるのは音心だけだとわかり、かけがえのない存在だと感じている。

エ 我ながら普段からは考えられない行動をとってしまったと悔やんでいたが、悔やむ必要はないと音心が励ましてくれていることが伝わり、居心地がよいと感じている。

6. ———線部5に「早紀は目立たないように、丸いすに腰をまるめて座っていた」とありますが、このときの早紀の気持ちを説明した次の文章の I III にあてはまる言葉を、指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

もともと演奏者としては部内において I (三字) であるうえに、右手を怪我しているために II (四字) も同然の立場であることを心苦しく思っている。その一方で、部活に参加しなくてはならないとわかっているが、合唱コンに向けて III (四字) をしたいという思いが強くこみ上げている。

7. ———線部6に「少し意外だった」とありますが、早紀がこのように思った理由を五十字以内で説明しなさい。

8. ———線部7に「音心はこっそり親指を立てた」とありますが、このときの音心の気持ちとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 先輩の言い方には裏がありそうな気がするため、早紀がこの先いやな思いをするかもしれないと心配ではあるが、今は早紀の背中を押すことに専念しようと決意する気持ち。

イ もともとは内気な性格であるはずなのに、先輩に内心おもしろく思われない可能性があったとしても、自分の意志をはっきり示して行動に移した早紀を応援する気持ち。

ウ いつもいやな言い方ばかりしてくる先輩だったが、早紀に言い返すことができている姿を見てすっきりし、先輩をやり込めてくれた早紀を称賛する気持ち。

エ いつも人の顔色ばかりうかがっていた早紀が、初めて自分の意志で行動する姿に成長を感じ、これからも早紀は成長し続けるにちがいないと確信する気持ち。

## 二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1

江戸時代まで、村はひとつにまとまっていた。いえ、ひとつにまとまらないと、生きていけません。一番の理由は、田畑の水です。

日照りの夏に、もし、誰かが自分の水田に水を勝手に引いたら、他の水田は干からびて、稲が死んでしまいます。そうなると、村全体が減びます。

村は、全体に水が行き渡るように、不公平のないように、常に厳しく監視しなければなりません。村がひとつにまとまらないと村人は生きていけなかったのです。

もし、日照りの夏に隣村が水を強引に横取りしようとしたら、村としては戦わなければいけません。水がどうしても足りない時は、どこからか水を引くか、手に入れる作業をする必要がありました。それはすべて、村単位で考え、動くことでした。

これらの行動に参加せず、自分の畑の仕事だけをしたり、自分の田んぼにだけ水を引いたりした人は、村の掟（ルール）を破ったことになります。そういう人間は、村では生きてゆけません。でした。

「村八分」という言葉があります。

村の掟（ルール）を破った者は、村仲間から「村八分」にされます。

それは、火事とお葬式以外は、無視して口をきかない、仲間に入れない、取り引きしない、という恐ろしい仕打ちです。火事とお葬式は、優しさから手伝うではありません。

火事は、とにかく消さないと村全体が燃えてしまうからです。

お葬式は、死体をちゃんと埋めないと、死体が腐って伝染病が広がる可能性があります。ですから、しょうがなく火事とお葬式を手伝ったのです。そこに優しさはありません。

逆に言えば、村の掟（ルール）に従っている限りは、村は村人を守りました。

これは、一神教とまったく同じです。

神様を信じている限りは、神様は信者を守ってくれるように、村も、村の掟（ルール）を守っている限り、村人を守りました。

A、田植えの時に、体を壊して動けなくなったら、他の村人が代わりに働きまし  
刈り入れの時も、風邪をひいてしまったら、他の村人が代わりに刈り入れしました。

結婚相手がなかなか見つからない若者がいたら、村全体の問題として、なんとか相手を見つけるように努力しました。  
この強力なつながりが「世間」です。

「世間」は結婚相手の世話や、ケガをした時の助け合いや、田畑への水の配分など、あらゆる面であなたを守りました。  
それは、その個人のためだけではなく、村全体のためになるからです。

村で協力しながら結婚相手を見つければ、やがて、子供が生まれて、働き手となり、村は発展していきます。  
結婚相手が見つからず一生独身のままなら、村全体も困ります。

村は、つまり「世間」は、ちゃんと掟(ルール)に従っている限り、ずっとあなたの面倒を見てくれたのです。  
それはそれは強力な守り神でした。

村だけではなく、商人は商家が、武士は武家という強力な「世間」がありました。  
まさに、日本の強力な一神教と言えるものでした。

これに所属していなければ、江戸時代は生きていけませんでした。  
例えば、武士は「世間」である武家を飛び出ただけで、脱藩者となり、無宿者と呼ばれて犯罪者となりました。

それぐらい「世間」は日本人にとって密接なものでした。

B、<sup>3</sup>今、「世間」なんて聞いたことがないけどなあ、とあなたは思いましたか？

そうです。現在、江戸時代のような強力な「世間」は残っていません。どうしてでしょうか？  
それには、もちろん、理由があります。

明治時代になって、明治政府は、「世間」というものを壊そうとしました。

村が村人の生活を守る時代から、国が国民を守る時代に入ったからです。

村や商家、武家が一番偉いままだと、国が困るのです。

「富国強兵」という言葉を勉強しましたか？

国を豊かにして、強い軍隊を持つとうという明治政府の方針です。

そのためには、「殖産興業」という、さまざまな産業を起こして、日本を経済的に近代国家にしようと明治政府は計画  
しました。



〔C〕、いろいろな村の子供がひとつの学校に行き、いろいろな村の人達がひとつの工場に集まり、いろいろな村の人達が軍隊に集められましたから、少しずつ強力な「世間」は崩れていきましたが、それでも、「世間」という考え方、感じ方はずつと残ったのです。

(鴻上尚史『「空気」を読んでも従わない 生き苦しさからラクになる』による)

1. 〔A〕〔C〕にあてはまる言葉として適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア でも    イ もちろん    ウ まさに    エ 例えば

2. 線部1「江戸時代まで……いけませんでした」について、次の(1)〔3〕に答えなさい。

(1) 村がひとつにまとまって生きていくためには、どのようなことが必要でしたか。十一字で抜き出しなさい。

(2) 村がひとつにまとまるということの例として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 田畑の水の供給が偏らないように複数の水源をみんな確保する。

イ 水を奪われそうになったら協力して敵よりも前に攻め込む。

ウ 自分の畑のことだけでなく村の生産量の総量を考えて耕作する。

エ 水を確保する作業ができる若者を残すために村の中で結婚する。

(3) 村はひとつにまとまらないと生きていけないという考えに従わない者は、どのような扱いを受けましたか。「く」を受けた」につづくように四十七字で探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。

3. ——— 線部2に「一神教とまったく同じです」とありますが、このことについて次のようにノートにまとめました。  
I V にあてはまる言葉を、指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

一神教 …… 信者が I (八字) 限りは守ってもらえる

村 …… 村人が II (三字) に従っている限り、面倒を見てもらえる

(例) III (七字)

ケガをした時の助け合い

田畑への水の配分 など



「世間」という強力なつながり



個人の問題だけではなく、IV (六字) に対しても作用する

〈村と同じような「世間」〉

商人にとっての商家や武士にとっての武家は、V (六字) として作用した





7. ———線部5に『世間』という……示しました」とありますが、その後起きたことの説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 国民同士の新しい関係性を政府が示したことにより、学校や工場といった元々存在しなかった集団が新たに生まれることになったが、その結果かえって人々が「世間」を強く求めるようになっていった。

イ 見知らぬ者が互い（たが）につながる制度を政府が推し進めたことにより、従来の「世間」のあり方から変わっていった側面はあったが、人々は慣れ親しんだ関係性である「世間」を捨てることはできなかった。

ウ 従来の「世間」を政府が徹底的（てつていき）に否定したことにより、人々は昔ながらの「世間」を守ろうと武力などで強く反発したが、結局国の方針には逆らえないために少しずつ強力な「世間」は崩れていった。

エ 新しい時代に合った人間関係を政府が支持したことにより、昔ながらの関係性にすぎる人を多く生み出したが、その結果として新しい関係性を受け入れた人たちとの格差が大きい「社会」になっていった。

三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 皇<sup>き</sup>后<sup>ご</sup>様が手<sup>て</sup>を振<sup>ふ</sup>る。  
② 雑<sup>ざ</sup>木<sup>ぼく</sup>林<sup>りん</sup>を歩<sup>あ</sup>いてい<sup>い</sup>く。  
③ ひまわりの種<sup>たね</sup>が発<sup>は</sup>芽<sup>つ</sup>した。  
④ 頬<sup>ほ</sup>が赤<sup>あか</sup>みを帯<sup>お</sup>び<sup>び</sup>る。  
⑤ 魂<sup>たましい</sup>が宿<sup>す</sup>る。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① クキョウに立<sup>た</sup>たさ<sup>さ</sup>れる。  
② ヒヤツカ店<sup>てん</sup>へ出<sup>で</sup>か<sup>か</sup>ける。  
③ ハイクをよ<sup>よ</sup>む。  
④ 相<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>に思<sup>し</sup>い<sup>い</sup>をツ<sup>つ</sup>げ<sup>げ</sup>る。  
⑤ カガミの前<sup>まへ</sup>に立<sup>た</sup>つ。

余白